

南アジア世界と東南アジア世界の展開

南アジアでは、ヒンドゥー教が仏教などの宗教を受け入れながら栄えた。一方、東南アジア諸地域は南アジアや中国と交流し、その影響を受けながら独自の世界を形成した。

Q▶ 南アジアで生まれた宗教や文化はどのように広がり、また東南アジアはどのような社会を築いたのだろうか。

仏教の成立と南アジアの統一国家

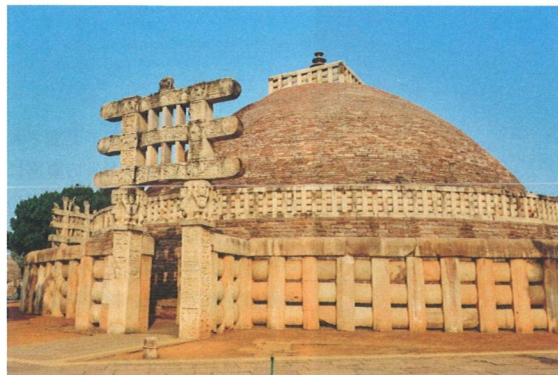
1

Q▶ 南アジアで生まれた宗教はどのように展開し、また、社会にどのような影響を与えたのだろうか。

① 生前の行為によって、死後に別の生を受ける過程が繰り返されるとする考え方。

② ウパニシャッド哲学では、宇宙の本体である梵(ブラフマン)と人間存在の本質である我(アートマン)が本来1つのもの(梵我一如)であり、その同一性を悟ることによって解脱に達することができるという一元論的な世界観が説かれた。

サーンチーの仏塔 インドの仏塔の典型的なもので、1世紀に完成した。塔門には仏教に関連した図が彫られている。



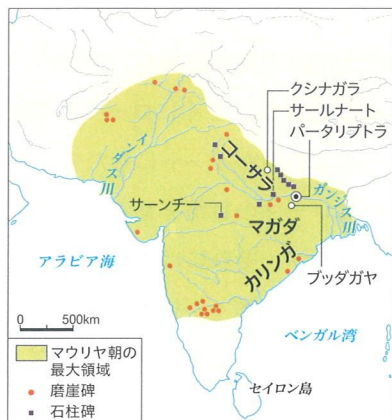
都市国家の成長と新しい宗教の展開

Q▶ 仏教やジャイナ教などの新たな宗教に共通する点は何だろうか。

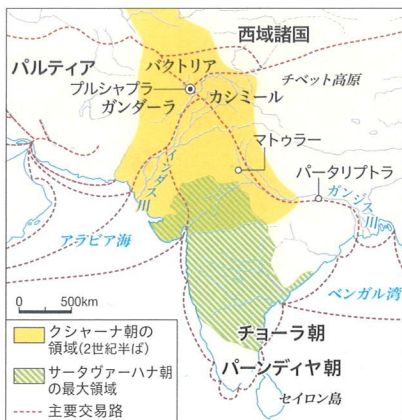
南アジアでは、前6世紀頃に政治・経済の中心がガンジス川上流域から中・下流域へと移動して、城壁で囲まれた都市国家がいくつも生まれた。そのなかからコーサラ国、つづいてマガダ国が有力となった。またこれらの都市国家では、豊かな農業生産を背景に各地との交易が発展して、クシャトリヤやヴァイシヤが勢力をのぼすなど、社会が大きく変化した。

こうした変化のもとで、新たな思想や宗教が生まれた。まず現れたのがウパニシャッド哲学であり、バラモン教の祭式至上主義から転換して内面の思索を重視し、輪廻転生という迷いの道から、人はいかに脱却するかという解脱について説いた。

一方、ガウタマシッダールタ(尊称はブッダ)が開いた仏教は、心の内面から人々の悩みを解くことを重視し、正しいおこないを実践して煩悩を捨て去ることで、解脱へと至ることができると説いた。また、ヴァルダマナが開いたジャイナ教は、解脱のためにとくに苦行と不殺生を強調した。両宗教はバラモン教の権威やヴァルナ制を否定した宗教であったため、バラモン教は民間信仰を吸収して信仰の幅を広げ、ヴェーダの神々にかわってシヴァ神やヴィシュヌ神が主神となるヒンドゥー教も芽ばえはじめた。



マウリヤ朝の領域



クシャーナ朝とサータヴァーハナ朝の領域



アショカ王石柱頭部のライオン。サルナートの仏跡で発掘されたもので、図の中央部の法輪は現在のインド国旗の図柄にも使われている。アショカ王石柱は各地に現存し、石柱部分に勅令が刻まれていることが多い。

統一国家の成立

▶ 南アジア最初の統一王朝のもとで、仏教はどのように発展したのだろうか。

前4世紀、マケドニアのアレクサンドロス大王がアケメネス朝を滅ぼし、さらに西北インドにまで進出した。王はインダス川流域を転戦し、各地にギリシア系の政権が誕生した。この混乱から、前4世紀末に登場した南アジアで最初の統一王朝が、**マウリヤ朝**であった。その創始者の**チャンドラグプタ王**は、ガンジス川流域を支配していたマガダ国のナンダ朝を倒して、首都をパターリプトラにおいた。つづいてインダス川流域のギリシア勢力を一掃し、さらに西南インドとデカン地方を征服した。

マウリヤ朝の最盛期は**アショカ王**の時代であった。王は、征服活動で多くの犠牲者を出したことを悔い、仏教への帰依を深めた。そして、ダルマ(法、守るべき社会倫理)を理念とした統治と平穏な社会をめざして各地に勅令を刻ませた。また、仏典の結集(編纂)や各地への布教をおこなった。しかし官僚組織と軍隊の維持が財政難をまねいたことや、王家に対するバラモン階層の反発もあり、マウリヤ朝は王の死後に衰退した。

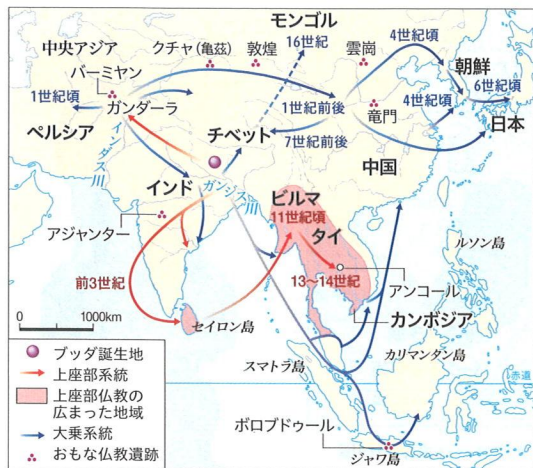
クシャーナ朝と大乘仏教

▶ クシャーナ朝は、ほかの地域とどのような関係をもっていたのだろうか。

マウリヤ朝の衰退に乗じて、前2世紀にギリシア人勢力がバクトリア地方から西北インドに進出し、つづいてイラン系遊牧民も同地に進出した。さらに紀元後1世紀にはバクトリア地方からクシャーン人が進出し、**クシャーナ朝**を建てた。王朝は2世紀半ばの**カニシカ王**の時代が最盛期であり、中央アジアからガンジス川中流域に至る地域を支配した。



カニシカ王の像。厚手のコートをまとい、ベルトをした遊牧民らしい出で立ちの像。



仏教の伝播

- ①現在では、大乘側から与えられた蔑称である小乗にかわって、多くの部派にわかれたそれまでの仏教を部派仏教と呼んでいる。そのうちの上座部は、前3世紀にセイロン島に伝えられ、そこからさらに東へ広がり、東南アジアの大陸部で大きな勢力をもつようになった。
- ②それまでブッダは恐れ多いものとされ、具体的な像がつけられることはなかった。



ガンダーラ仏像 ガンダーラ様式の石彫。2世紀頃。

と考え、出家しないまま修行をおこなう意義を説いた菩薩信仰が広まった。この運動は、「あらゆる人々の大きな乗りもの」という意味で大乘と自称するとともに、自身のみの悟りを目的として出家者がきびしい修行をおこなう旧来の仏教を、利己的であると批判して小乗と呼んだ①。また、ヘレニズム文化の影響を受け、仏像が生み出された②。クシャーナ朝の保護を受けた大乘仏教は、ガンダーラを中心とする仏教美術とともに各地に伝えられ、中央アジアから中国・日本にまで影響を与えた。さらに、すべてのものは存在せず、ただその名称だけがあると説いた竜樹(ナーガールジュナ)の「空」の思想は、その後の仏教思想に大きな影響を与えた。

クシャーナ朝は3世紀になると、西はイランのササン朝に奪われ、東は地方勢力の台頭を受けて滅亡した。

インド洋交易と南インドの諸王朝

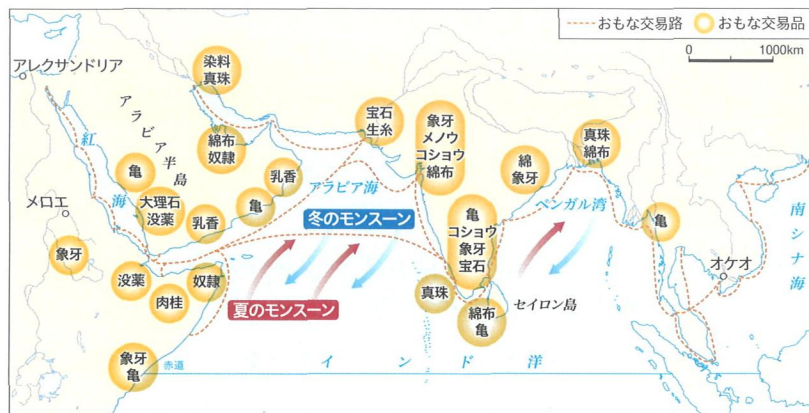
Q 「海の道」の交易において、南インドはどのような役割を担っていたのだろうか。

南インド(インド半島南部)はドラヴィダ系の人々が居住した地域であり、紀元前後からタミル語を使用した文芸活動が盛んにおこなわれ、その後のバクティ運動のなかでも多くの吟遊詩人が生まれるなど、独自の世界が形成された。

また、南インドは古くからインド洋を通じてローマ帝国と交易関係をもち、ローマの貨幣も各地で大量に発見されている。西方との交易は、ローマの発展に呼応してギリシア系商人が活動を始める1世紀頃から盛んであった。同じ頃、東方の中国と結ぶ航路もひらけていた。ローマ

クシャーナ朝は交通路の要衝にあり、国際的な交易が活発におこなわれた。とくにローマとの交易が盛んであり、大量の金がいンドにもたらされた。王朝のもとではローマの貨幣を参考にして金貨が大量に発行されたが、それにはイランやギリシア・インドなどの文字や神々が描かれ、活発な東西交流がおこなわれていたことを示している。

紀元前後には、仏教のなかから新しい運動が生まれた。自身の悟りよりも人々の救済がより重要



インド洋航海図 インド洋西側のアラビア海では夏に南西から、冬に北東から季節風(モンスーン)が吹く。この季節風を利用することで、長距離を短期間で航海することができた。

帝国の衰退後は東南アジアや中国との交易の重要性が増し、マラッカ海峽・インドシナ半島南部が航海上の要衝となり、セイロン島・扶南・チャンパー・シュリーヴィジャヤなどが、香辛料や絹・茶・陶磁器などの交易によって栄えた。こうして、地中海から紅海やペルシア湾を通り、アラビア海を渡って南アジアの各地に達し、さらに東南アジアや中国に至る「海の道」がひらけ、交易が活発におこなわれた。南インドは、綿布など、「海の道」の交易での重要商品を産出した。

→ 港市国家

マウリヤ朝の衰退後、デカン高原からインド洋沿岸にかけての広い領域で勢力をもったのが、**サータヴァーハナ朝**であった。この王朝のもとでは、仏教やジャイナ教が盛んに活動をおこなうとともに、北インドから多くのバラモンがまねかれたため、北インドと南インドとの文化交流が進んだ。

さらにインド半島南端には、初期のチョーラ朝やパーンディヤ朝などの諸王朝が存在し、サータヴァーハナ朝と同じく、綿布などの輸出を通じて、インド洋交易を盛んにおこなった。

季節風貿易によって、ローマとの交易も行った。

Q『エリュトゥラー海案内記』は、紀元後の早い時期にギリシア人が著した。エリュトラ海は直訳すると紅海という意味だが、ここではインド洋全体を指している。インド洋のネットワークは、どれほどの地理的広がりをもっていたと考えられるだろうか。

『エリュトゥラー海案内記』

初めて航海長のヒッパロスが、交易地の位置と海の形状とを勘案して、外海を横断する航法を発見した。それ以来我々のところのエーシアイ①の季節に、大洋から局地的に[いくつかの]風が吹くが、インド洋では南西風がおこり、[その風は]横断航法を最初に発見した人の名に因んで[ヒッパロスと]呼ばれる。……[インド半島南東部のコロマンデル海岸地方では]リミュリケー②まで陸に沿って航行する地元の船や、非常に

大きな丸木舟をくびきで繋ぎ合わせたサンガラと呼ばれる別の船、またクリューサー③やガンゲース④に渡航する極めて大きなコランディオボント⑤が[輻輳して]いる。

(藤勇造訳注『エリュトラ海案内記2』)

①地中海で夏季に北西の方角から吹く風。②インド半島南部のマラバル地方。③東南アジアの地名と考えられている。④ガンジス川下流のベンガル地方。⑤船の一種。



踊るシヴァ神 シヴァ神は、ヒンドゥー教の破壊の神である。舞踊の神ナタラージャとしても知られており、高さ1.54mにおよぶこのブロンズ像は、炎を背景に、無知の象徴としての小人を足で踏みつけながら踊っている。12～13世紀。

① 前2世紀から後2世紀にかけて成立した法典であり、人類の始祖であるマヌが述べたものとする。4つのヴァルナがそれぞれ遵守すべき規範について規定し、バラモンの特権的地位が強調されている。

② 『マハーバーラタ』はバラタ族の王位争奪の物語で、様々な神話や伝説が挿入されている。一方、『ラーマヤナ』は王子ラーマとその妻シーターとの物語である。どちらも現在も、南アジアから東南アジアにかけての影絵や舞踊などのテーマとなっている。

インド古典文化とヒンドゥー教の定着

2

Q▶ ヒンドゥー教は、どのようにして南アジアの社会に根づいていったのだろうか。

グプタ朝とインド 古典文化の黄金期

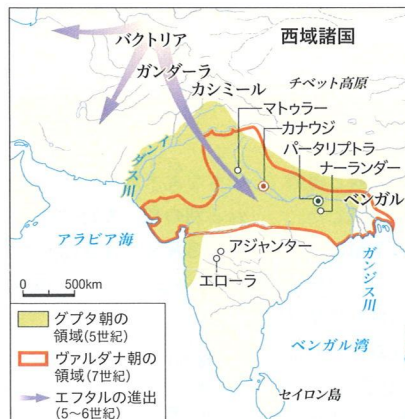
Q▶ グプタ朝のもとで、宗教や文化はどのように展開したのだろうか。

4世紀に入るとグプタ朝320頃～550頃がおこり、チャンドラグプタ2世Chandragupta II 在位376頃～414頃の時に最盛期を迎え、北インド全域を統治する大王国となった。グプタ朝は分権的な統治体制をとり、その支配地域は、中央部の王国直轄領、従来の支配者がグプタ朝の臣下として統治する地域、および領主が貢納する周辺の属領ぞくりょうから構成された。王朝下では仏教やジャイナ教が盛んとなり、中国（東晋）から法顕が訪れた。一方、村落からの租税収入が与えられるなど、影響力を失いかけていたバラモンが再び重んじられるようになった。また、バラモンの言葉であるサンスクリット語が公用語化された。

グプタ朝の時代には、民間の信仰や慣習を吸収して徐々に形成されていたヒンドゥー教が、社会に定着するようになった。ヒンドゥー教は、シヴァ神やヴィシュヌ神など多くの神々を信仰する多神教である。特定の教義や聖典にもとづく宗教ではなく、日々の生活や思考の全体に関わる宗教として、現在に至っている。

さらにこの頃には、『マヌ法典』①や、サンスクリット語の二大叙事詩『マハーバーラタ』『ラーマヤナ』②などが長い期間をかけて完成した。また、

宮廷詩人カーリダーサKalidasa 5世紀によって戯曲『シャクンタラー』がつくられた。天文学や文法学・数学なども発達し、十進法による数字の表記法やゼロの概念も生み出され、のちにイスラーム圏に伝えられて自然科学を発展させる基礎となった。美術では、ガンダーラ美術の影響から抜け出て、純インド的な表情をもつグプタ様式が成立し、



グプタ朝とヴァルダナ朝の領域

インド古典文化の黄金期が出現した。都市での経済活動も活発であり、王の像が描かれた金貨やタカラガイなど様々な貨幣が発行された。

グプタ朝は、中央アジアの遊牧民^{ゆうぼくみん}エフタル^{エフタル}の進出により西方との交易^{こうえき}が打撃を受けたことや、地方勢力が台頭^{たいとう}したことで衰退^{すいたい}し、6世紀半ばに滅亡^{めつぼう}した。その後、ハルシャ王^{Harsha}がヴァルダナ朝^{Vardhana}をおこして北インドを支配したが、王の死後に王朝は急速に衰退した。

当時の支配者の多くはヒンドゥー教の熱心な信者であったが、仏教やジャイナ教にも保護を与えた。唐からインドに旅した玄奘^{げんじょう}は、ハルシャ王の厚い保護をうけながらナーランダー僧院で仏教を学び、帰国して『大唐西域記』を著した。また、7世紀後半には義浄^{ぎじょう}がインドを訪れ、帰国の途上に『南海寄帰内法伝』を著した。しかし、仏教はグプタ朝衰退後の商業活動の不振^{ふしん}によって商人からの支援を失い、また、仏教やジャイナ教を攻撃するバクティ運動^{bhakti}が6世紀半ばから盛んになって、衰退に向かった。



アジャンターの壁画 インド西部のアジャンターには、前1世紀頃から後7世紀頃にかけて造営された30の石窟があり、そのほぼ半数に、インド最古のものを含む仏教関係の壁画が描かれている。

アジャンター石窟寺院

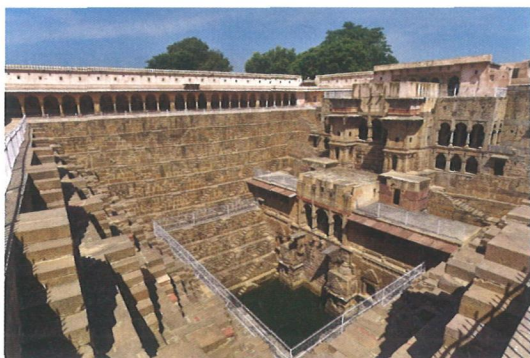
地方王権の時代

Q ▶ 諸勢力が割拠するなか、各地の政権は、何を目的にどのような政策をとったのだろうか。

8世紀からイスラーム勢力が進出してくる10世紀頃までの南アジアは、統一的な中央政権が存在せず、多数の地方王権からなる時代となり、北インドではラージプート^{Rajput}と総称されるヒンドゥー諸勢力の抗争が続いた。諸勢力は支配の正当性を示すために巨大なヒンドゥー教寺院を建立し、井戸や貯水池の建設などもおこなった。また、ベンガル地方のパール朝^{Pala}は、ナーランダーを仏教の中心地として復興させ、他地域で衰退していた仏教に最後の繁栄期をもたらししたが、王朝の衰退とともに仏教は再び勢力を失っていった。

一方、南インドの代表的な王朝のチョーラ朝^{Chola}は、前3世紀頃～後4世紀頃、9～13世紀灌漑施設の建設によって安定した農業生産を実現し、さらに「海の道」の交易活動も活発におこなった。最盛期の10～11世紀には、セイロン島や東南アジアへ軍事遠征をおこなったり、中国の北宋^{ほくそう}に商人使節を派遣するなどした。

③バクティ運動は、初期にはジャイナ教と仏教に対する攻撃、シヴァ神やヴィシュヌ神に対する熱烈な信仰、神の愛の強調、歌や踊りをとものった信仰告白などを特徴とする宗教運動であった。南アジアで仏教が衰退し、ジャイナ教の勢いも衰えてヒンドゥー教の優位が確立すると、宗派対立の側面は消えていったが、運動はその後長く続いた。



チャンド=バオリ インド西北部のラジャスタン州にある巨大な階段状の井戸。ラージプート時代、8～9世紀頃の建造。

東南アジア世界の形成と展開

3

Q▶ 東南アジアにおける国家形成には、どのような特徴があるのだろうか。

東南アジアの 風土と人々

Q▶ 東南アジアの風土は、ほかのアジアや日本とどのように異なるのだろうか。

①港市(港町)を中心に建設された国家のことであり、中継貿易や内陸からの産物の輸出によって栄えた。



銅鼓 ドンソン文化を特徴づける青銅製の片面太鼓。権力の象徴として、祭祀に用いられた。高さ78cm。



オケオ出土のローマの金貨
ローマ皇帝マルクス=アウレリウス=アントニヌス(→p.79)の肖像と銘がある。

東南アジアは、インドシナ半島を中心とした大陸部と、マレー半島から現在のインドネシアやフィリピンを含む島々からなる諸島部から構成される。大陸部では、北部の山地に発する長大な河川が平原に流れ出てデルタを形成し、様々な言語を話す人々が入り組んで分布している。他方、諸島部では、高地から流れ出る河川が平地を横ぎり、それらの河川と海を交通路にして、おもにマレー系の諸言語を話す多くの民族が移動を繰り返した。気候的には、いずれの地域も気温が高いが、年中雨量が多い熱帯雨林気候と、雨季と乾季に二分されるサバナ気候にわかれる。

東南アジアは、香料をはじめとする資源の豊かさのゆえに、早くから外の世界とつながり、古くは南アジアや中国、ついでイスラームの影響を受けつつ独自の文明を築いた。とくに南アジアや東アジアとの海上交易の拡大にともなって多くの港市国家が誕生した。15世紀にはマラッカを中心に活発な交易活動が展開され、16世紀には西欧勢力が進出した。19世紀以降は中国南部や南インドから多数の人々が流入し、定住する人も増えていった。こうして外部世界から移動してきた多様な人々と文化を受け入れることにより、今日の東南アジア世界が形成された。

南アジア・中国文明の受容 と東南アジアの国家形成

Q▶ 東南アジアは、南アジアや中国とどのような関係にあったのだろうか。

東南アジアでは、前2千年紀末に、ベトナムやタイ東北部を中心に青銅器が製作されていた。前4世紀になると、中国の影響下に、ベトナム北部を中心に独特な青銅器や鉄製農具を生み出したドンソン文化が発展した。青銅製の銅鼓は、中国南部から東南アジアの広い地域で見えされており、当時の文化や交易の広がりを物語っている。

紀元前後から南アジアや中国との交流が盛になると、1世紀末に扶南がメコン川下流域に建国された。この国の港であったオケオの遺跡から

なん
南
1世紀末～7世紀

らは、ローマ貨幣やインドの神像、中国の鏡などが出土している。また2世紀末には、チャム人がベトナムの中部に、のちに**チャンパー**と呼ばれる国を建てた。

4世紀末から5世紀になると、南アジアから船舶が盛んに来航し、広い地域で「インド化」と呼ばれる諸変化②が生じ、各地の政権のなかに、南アジアの影響が強くみられるようになった。

大陸部では、6世紀にメコン川中流域にクメール人によってヒンドゥー教の影響の強い**カンボジア**がおり、扶南を滅ぼした。この王国は、9世紀以降アンコールに都をおき、12世紀にはヒンドゥー教や仏教の強い影響を受けながらも独自の様式と規模をもつ**アンコール=ワット**を造営した。

エーヤワディー(イラワディ)川下流域では、9世紀までビルマ(ミャンマー)系のピュー人の国があった。11世紀には、エーヤワディー川中流域の中央平原における稲作を基盤として**バガン朝**がおり、インドやセイロン島とも交流をもち、上座部仏教が広まった。

チャオプラヤ川下流域では、7世紀から11世紀頃にかけてモン人によるドヴァーラヴァティー王国が発展した。さらに13世紀半ばには、タイ北部にタイ人による最古の王朝である**スコータイ朝**がおこった。これら



7～8世紀頃の東南アジア

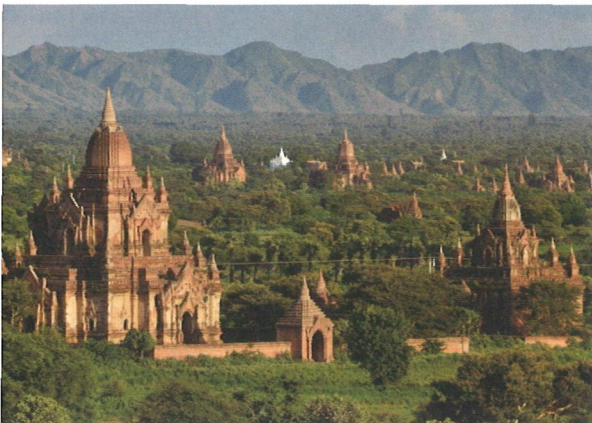
② ヒンドゥー教や大乗仏教、王権概念・インド神話・サンスクリット語・インド式建築様式などが受容され、東南アジアの基層文化に影響を与えた。



アンコール=ワット 12世紀前半の王の墓として造営されたクメール建築の代表。主神はヒンドゥー教のヴィシュヌ神であり、回廊には『マハーバーラタ』などの物語が浮き彫りされている。



アンコール=ワット
回廊浮き彫り



バガンの仏教遺跡群 バガン朝の都であったバガンには、おもに11～13世紀にかけて、数多くのパゴダと呼ばれる仏塔や上座部仏教の寺院が建立された。



ボロブドゥール この世界的な仏教遺跡は、20世紀初めからの大規模な復元工事により現在の姿となった。回廊には経典の内容を表す多数の浮き彫りがほどこされている。縦・横120m、高さ42m。



ボロブドゥール

①三仏齊とは中国語史料での表記であり、アラブ人はザーバジュと呼んだ。かつてシュリーヴィジャヤが影響力をもっていたマラッカ海峡地域の港市国家群の総称と考えられている。

②陳朝では、ベトナム語を書くために、漢字を利用したチュノムと呼ばれる文字がつけられた。

の国家はいずれも上座部仏教を信仰した。

諸島部でも「インド化」が進み、いくつかの王国が成立した。7世紀半ばには、スマトラ島のパレンバンを中心に**シュリーヴィジャヤ**が成立した。この国家は海上交易に積極的にたずさわ^{ちやうこう}り、唐にも朝貢使節を派遣した。義浄は南アジアへの往復の途中に滞在し、仏教が盛んな様子を記している。その後、シュリーヴィジャヤを引き継いで、**三仏齊**①が繁栄した。中部ジャワでは、大乘仏教国の**シャイレンドラ朝**やヒンドゥー教国の**マタラム朝**が生まれた。シャイレンドラ朝のもとでは、仏教寺院の

ボロブドゥールが建造されたが、その後、ヒンドゥー教の勢力が強くなっていった。

ベトナムでは、**前漢時代**以来、**紅河デルタ**を中心にした**北部地域**が中国に服属していたが、独立への動きも強く、10世紀末には北宋に独立を認めさせ、11世紀初めには李氏が**李朝**を成立させ、のちに国名を**大越**(ダイベト)と称した。しかし、李朝とそれにつづく**陳朝**②の統治は、いずれも広域支配にはならず、チャンパーとも対立を続けた。ベトナム中部から南部にかけて長期にわたって勢力を保持したチャンパーは、インド洋から南シナ海を結ぶ海上交易にたずさわ^{ちやうこう}り、南アジアの影響を強く受けたいくつかの寺院群を築いた。



11～12世紀頃の東南アジア